

Thought on Pye

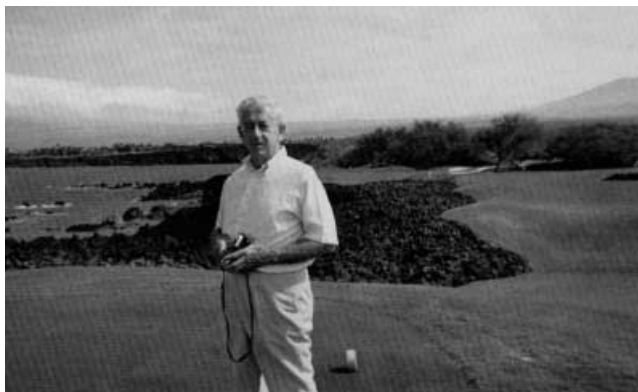
Derek Fair

デレク・フェア

1922年、ニュージーランド生まれ。53年より、東京メディカル・サージカル・クリニックに内科医として勤務。現在、同クリニック医院長。77年、医療活動に対し英女王より受勲。趣味は読書、音楽鑑賞、旅行、ゴルフ。

人生哲学は、“This above all, to thine own self be true, And it must follow, as the night the day, Thou canst not then be false to any man.” (Shakespeare/Hamlet)

「ところでいちばん大事なことは、己に忠実なれ。この一事を守れば、あとは夜が日につづくごとく万事自然に流れだし、他人にたいしても、いやでも忠実にならざるをえなくなる」(大臣ポローニアスによる、息子へのはなむけの言葉。福田恒存訳『ハムレット』第一幕第三場より)。



— Pye に関する考察 —

雑誌や参考書を計画的に買う人はどのくらいいるだろうか。私自身のやり方もでたらめで、いつも書評や広告をもとに選んでいる。が、特に年配の外科医は、“Conn’s Current Therapy”のような、出版年が明記されている最新版を一冊は手元に置いて、時代遅れの印象を避けたほうがいいだろう。

最近私は、長年信頼して来た“Pye’s Surgical Handicraft”の16版(1950年発行)を、新しい22版と取り替えることにした。旧版を捨てる前に、肩脱臼の整復に関するヒポクラテスの方法の記述について、ちょっと比較してみた。

16版のテキストでは、「もしコッヘルの徒手整復を試みても脱臼が整復しなければ、ヒポクラテスがあみだした方法を試みるべきである。すなわち、外科医は両手で手首をつかみ、靴を脱いで患者の上腕と胸の間に足を置く。膝と肘をまっすぐ伸ばして、上体を反らせて牽引する。ゆっくりと患者の腕を外転し、次に足をこの支点にして内転する。コッヘル式もヒポクラテス式も本質的には同じであるが、後者の方がかかる力が大きく、腋窩動脈や神経を傷つけることが少ない。無理に腕を外転するより直接牽引の方が、上腕骨頸の骨折の危険も少ない。」

22版では次のように改訂されている。「もし上記の方法が適当でなかったら、ヒポクラテス式が有効である。患者に全身麻酔をかけ、寝椅子か手術台に仰臥させる。術者は靴を脱ぎ、腕を牽引しながらつま先を使って骨頭を関節に入れる。」この記述では、手技も整復の仕組みの説明も不十分である。正しくは、術者の足の幅がてこの支点の働きをし、近位上腕骨をゆっくり外に押し出し、腕の外転に助けられて骨頭が関節窩の縁上に滑り込む。つま先はなんの役目も果さないのである。私は興味を覚えて、“Turek’s Orthopedics”の1977年版を調べてみた。「コッヘル式は最も一般的である。足を腋窩に入れて牽引するヒポクラテス式は、腋窩組織を傷つけることがあるので不適とされるべきである。」

ヒポクラテスの原書は入手不可能なので、引用はできないが、次版のPyeには初期テキストが復元されるよう望みたいものだ。ヒポクラテス式は、術者が足を使う唯一の合法的医療処置として、全ての医学生や救急医の記憶に刻まれているからである。これ以外では、医者たるもの患者の身体のいかなる部分にも足を当ててはならない。

数年前のこと、南支那海を航海する大型タンカーの乗組員が肩を脱臼した。電話して来た船長に、私はPyeで確認しながらヒポクラテス式を説明した。間違いなくコッヘル式よりやさしく説明できる。約一時間後、船長の処置は成功し、タンカーは予定どおりブルネイに向かった。もし船長が徒手整復のためにつま先を使っていたら、進路変更しなければならなかったかもしれない。これは嬉しい経験だった。

ちなみに、ラム酒を麻酔代わりにする、英国の伝統的方法を使ったかどうかは聞かなかった。昔の三段櫓船の漕ぎ手は、肩脱臼がしょっちゅうだったから、ラム酒も必需品だった。

さて、新版をいつ買うだけでなく、旧版をいつ捨てるかという問題が残されている。典型的な肩脱臼の解剖学的特徴も、その整復の仕組みの原理もヒポクラテス時代から変わっていない。だから私は、1950年版のPyeを取っておかなくてはならない。それに他にも価値ある記述があるかも知れない。ところで旧版の表紙には、“Vel de minimis curat chirurgicus”(どんなに瑣細なことにも外科的治療は可能である。)という一文がある。これも、いつ削除されるのか、また何人が理解しているのか、知りたいものである。(“British Medical Journal”より抜粋)